

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國其他

對

荒木貞夫其他

官警供述審

供述者 富田健治

自分機外國ニ行ハルル方式ニ從ヒ先ヅ別紙ノ通り官警ヲ屬シタル上
次ノ如ク供述致シマス

余、富田健治ハ官誓ノ上左ノ通り陳述ス。

一、余、富田健治ハ大正十年京大卒後内務省ニ入り地方官職、警察部長
内務事務官ヲ歴任シ、昭和十二年六月第一次工部内閣ノ管保局長トナリ
十三年末長野縣知事拜命、昭和十五年七月第二次近衛内閣ノ成立ニ伴ヒ
内閣書記官長ニ任ゼラレ、第三次近衛内閣ニモ兼任シ、昭和十六年十月
十六日第三次近衛内閣總辭職ト共ニ辭任、貴族院議員ニ任ゼラレタルモ
ノナルトコロ、管保局長以來木戸侯ヲ時々訪問、殊ニ書記官長當時ハ以
府ト内府トノ連絡ニ付極メテ煩繁ニ接觸シタモノデアアル。

内閣書記官長トシテ余ハ閣議ノ席ニアリシ故閣員ノ意見ハ之ヲ知悉シテ
タ。又余ハ閣議ニ於テ或ハ又閣議以外ニ於テ閣員ト談合シタ。斯ク各方
面ノ事態及意見ヲ常ニ知り又首相ノ指示ニ基イテ之ヲ貫徹スルノハ余ノ
任務ノ一部デアツタ。

二、余ハ第三次近衛内閣書記官長在職中、及川海相及四軍務局長ト煩繁ニ
談合シ、海軍ガ日米外交々涉ヲドモ極積シ、戦争ハ飽迄モ避ケタイ
意同デアアルコトヲ充分知ツテ居タ。

三、一九四一年（昭和十六年）十月十一日余ハ四軍務局長ヲ其官舎ニ訪
ヒ少時會議セリ。次イデ十時過頃及川海相ヲ官邸ニ訪問シタノデアアルガ
其際海相ガ語ラレタルコトハ余ノ記憶ニ實ニ明確ニ残ツテ居ル。「此際

日米戦争ハ避ケタイノデアツテ日分ハ飽迄モ父の福積ヲ希望スル。又陸軍ト異ツテ海軍ノ下層部ガ戦争シナケレバ收マラヌ等ト云フコトハ絶對ニナイ。海軍ハ特種トシテ上ガ定メタコトハ下ハ必ズ服従スルノデアアルノ點ハ全然心配ハ要ラヌ。但シ海軍トシテハ早ノ立場上、此ノ戦争反對ノ意見ヲ公式ニ明言スルコトハ出来ナイノデアアル。云々ト云ベタ。之ヨリ先余ハ海軍關係ノ人々トノ話ニ依リ及川大將ノ言ハ海軍ノ方針デアルコトヲ知悉シテ居タ。又余ハ近衛首相ガ對米平和解決ヲ非常ニ懸念シテ居ラレタコトヲ首相トノ會話ヨリ知ツテ居リタルガ故ニ余ハ及川大將ニ翌日ノ萩達會談デ強力ニ近衛公ヲ支援シ陸軍ヲ抑ヘテ日米交渉ヲ繼續シ得ル様努力セラレタイ旨ヲ告ゲタ。

四、之ニ對シ翌十二日朝岡局長ト電話ニテ談合中局長ヨリ「今日ノ萩達會談ノ席上ニ於テハ、和戦ノ決定ハ總理一仕ト言フ發言ヲスルツモリデア。軍トシテハ戦争スベキヤ否ヤヲ決定スル發言ハ出来ナイ。戦争スルヤ否ヤハ總理ガ決メルベキ問題デアルト思フ。ソコデ總理サヘハツキリ戦争ヲ避ケルト言ツテ眞ヘバヨイノデアアル。」ト言ツテ來タノデアアル。五、近衛内閣総辭職ニ先立ち岡事務局長ハ富時屢々余ニ對シ「日米交渉ハ續ノ爲ニハ近衛内閣ハ絶對ニ辭職シテハナラナイ。近衛公ヲ辭メサセナイ様ニ盡力シテクレ。」ト云ツタ。

六、一九四一年十月十二日近衛總理ハ恭任ノ私邸ニ東條陸相、及川海相、
野田外相、鈴木企畫院總裁ヲ招集シテ、日本交渉嶺台ノ見透ニ付會談ヲ
開イタ。此ノ會談ニ先立チテ余ハ岡、及川兩氏トノ會談ニツイテノ報告
ヲ近衛首相ニ提出シテアツタ。

余ハ右會談ノ行ハレタルトキ近衛公邸ニ居タガ、會談進行中ハ其ノ至
内ニハ居ナカツタ。會談終了後近衛首相ハ鈴木氏ニ依ル議事録宛書ヲ余
ニ手交シタ。同夜遅ク余ハ木戸侯ニ會ヒ鈴木氏ノ宛書ノ内容ヲ告ゲタガ
ソレガ木戸日記一九四一年十月十二日ノ内容デアアル。

七、一九四一年十月十四日午後武藤陸軍省軍務局長ハ余ノ許ニ來リ、「海
軍ガ本當ニ戰爭ヲ欲シナイナラバ、陸軍モ再考セネバナラナイ。然ルニ
海軍ハ陸軍ニ向ツテ表面ハ反對セズ總理一任ト云フコトヲ云ツテ居ル。
總理ノ裁斷ト云フ丈デハ陸軍部内ヲ押ヘルコトハ出來ヌガ、海軍ガ此際
戰爭ヲ欲セズト云フコトヲ公式ニ陸軍ニ言ツテ來ルナラバ陸軍トシテモ
部内ヲ押ヘルコトガ出來ル。云々」ト申入レテ來タ。

八、余ハ右ノ甲入レヲ陸軍務局長ニ話シタ處、「海軍トシテハ戰爭ヲ欲セ
ズト云フコトヲ公式ニ云フコトハ軍ノ立前カラシテ出來ナイコトデアアル
海軍トシテハ公式ニハ總理ノ裁斷ニ一任ト云フコト以上ニハ出ラレナイ
」ト答ヘタ。

九、第三次近衛内閣総辞職前、余ハ同草務局長ニ對シ「及川内相ヲ總理ニシタラ如何」ト詰シタルコトアリ。之ニ對シ同局長ハ「及川大府ハ以治家デハナイカラ總理ハツトマラヌ」ト答ヘタ。

十、一九四一年十月十九日頃余ハ第三次近衛内閣書記官長ヲ辭職シ其ノ後ノコトニ付山々話ヲ父次シタ。其際木戸内府ハ「近衛若ハ今少シ頌張ツテクメルコトハナイト思ツテ居タノニ十六日午後ニナツテ閣僚ノ辞表ヲトリツツアルト聞イテビツクリシタ。又其處迄行ツテ居ルナラ仕方がナイト思ツタ。十六日ニ東條陸相ガ自分ノ所ヘヤツテ來タガ、陛下ノ御言葉ガアレバ陸相モ必ズシモ外交交渉ニ反對スルモノトハ思ハレナカツタ。近衛若ハ返ス返スモ今少シ自重シテ欲シカツタ。云々」ト詰ラレタ。

十一、昭和二十年六月下旬以來終戦前夜ニ至ル間ニ於テ近衛公ハ屢々余ニ次ノ如キ談ヲ繰返サレタ。

「木戸侯ニ對シ種々ノ訪問者ガ批難ノ聲ヲ放ツケレドモ、自分ハ必シモ之等ノ批難ニ賛成シナイ」終戦當時近衛公ハ余ニ同ヒ次ノ如キ詰ヲナアレタ「終戦ニ對スル木戸侯ノ勢力ハ非常ナモノデアツテ陛下ノ了ノ強イ終戦ヘノ御行動モ一ニ木戸侯ノ力ニ依ルモノデアアル。終戦ノ切腹ノ第一人者ハ何ト云ツテモ木戸侯ダト思フ。云々」

Def, Doc, #2264

昭和二十二年（一九四七年）二月四日

於 極東國際軍事裁判所
供 証 者 富 田 健 治

右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明
シマス

同 日 於 同 所

立會人 福 積 重 盛

Def, Doo, #2264

ヲ誓フ

良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ試秘セズ又何事ヲモ附加セザルコト

官 誓 書

(署名捺印)

富田健治